


 書評

G ウォーレンシュタイン 著, 刃刀浩 訳

ストレスと心の健康

新しいうつ病の科学

加藤忠史

モノアミン仮説一辺倒だったうつ病研究は、この10年間に劇的な変貌を遂げた。そのため、旧来の教科書では説明不足な点が多々生じていたが、かといって良い教科書もない状況であった。そんな中本書は、この10年のうつ病研究の進歩をすべて取り入れ、これらを統合しようとした、大変意欲的な教科書である。

その第一の特徴は、抗うつ薬の作用機序とそれにまつわるモノアミン仮説から説きおこすことをせず、遺伝学、ストレスの影響、養育の問題、視床下部-下垂体-副腎皮質系の変化、と語っていき、かなり後になって初めてモノアミンが登場する点である。うつ病という疾患を語る際に、遺伝的危険因子、環境の危険因子であるストレスや養育の問題などについてまず語り、後になってから薬剤の作用機序について語るとするのは、当たり前といえば当たり前であるが、逆にこれまでのうつ病の見方が偏っていたことを示すといつてよいかもしれない。もしもそれが、著者の指摘するように、抗うつ薬開発戦略におけるコストベネフィット分析の影響を受けた偏った見方であったとしたら、我々精神医学者の見方も製薬会社の影響を潜在的に受けていたということかもしれない。

第二の特徴は、すべての項目に関して、詳しい記述を始める前に、基本的事項をきちんとわかりやすくまとめてあることである。遺伝学にしても、神経内分泌にしても、高校生レベルの知識の読者でも一気に最先端まで理解できるように導く著者の手腕はさすがである。

第三の特徴は、筆者の専門に偏るのではなく、うつ病にまつわる話題をほとんど網羅している

ことである。免疫系、生物リズム、サブスタンスP、脳機能画像など、うつ病の生物学に関する話題がほとんど網羅されている。

第四の特徴は、多くの説が紹介されているにもかかわらず、これらの現存の仮説すべてを統合しようと試みていることである。専門の研究者でさえ、モノアミン仮説、脳由来神経栄養因子(BDNF)、視床下部-下垂体-副腎皮質系、といった、ばらばらの事象を統合して理解することは困難である。その困難を克服することこそ、本書の訳者である刃刀博士のグループが現在まさに取り組んでいることであり、まだ研究途上と言うべきであろう。そんな研究途上の状態でも、著者は果敢にこれらの断片的な仮説を1つのストーリーにまとめ上げようと試みており、実際のところ、この大胆な試みはかなり成功していると言ってよいだろう。

第五の、翻訳書としての特徴は、何と言っても大変読みやすいことである。まさにこの研究分野で活躍している刃刀博士が訳されただけあって、随所に痒いところに手が届くような訳注が入り、訳語も実際に良く用いられている適切なものが使われていて、しばしば一般書でみられるような、気になる訳語の問題はほとんどない。刃刀博士の研究室で、初めてうつ病研究に携わる研究スタッフの人たちのための勉強会に使ったというだけあって、うつ病研究にこれから取り組む人には最適の本と言えよう。

(理化学研究所脳科学総合研究センター精神疾患動態研究チーム)

● 四六判 256頁 2005 定価2,520円(本体2,400円+税) 培風館